

テーマ

新教育課程の編成方針と 校内での推進方法

新課程入試までのスケジュール
資質・能力の組織的な
育成・評価の体制が必要

新学習指導要領に対応した2025年度入試（新課程入試）までのスケジュールと、高校現場における新学習指導要領に基づく教育課程（以下、新教育課程）の検討の流れを示したのが図1だ。21年度夏ごろには、「新学習指導要領に対応した実施要項の見直しに係る予告」が発表される。22年度には各大学が選抜予告を、24年度には「25年度大学入学者選抜実施要項」を発表する。高校では、22年度から新学習指導要領が年次進行で実施される。指導要録において観点別学習状況の評価の記載が求められるようになり、資質・能力の3つの柱を組織的に育成・評価する体制づくりに取り組むことが急務となっている。ベネッセ文教総研（以下、文教総研）が行った現場へのヒアリングによると、20年度秋から年度末にかけて新教育課程編成の仮案を作成し、21年度の5、6月に出示される検定済教科書見本を踏まえて、6月ごろまでに新教育課程を策定する学校が多かった。

図1 新課程入試までのスケジュールと、新教育課程の検討の流れ

		2020 (令和2) 年度	2021 (令和3) 年度	2022 (令和4) 年度	2023 (令和5) 年度	2024 (令和6) 年度
		小学校新課程	中学校新課程	高等学校新課程→		
		高3	高3	高3	高3	高3
		高2	高2	高2	高2	高2
		高1	高1	高1	高1	高1
入試 スケジュール	大学入学共通テスト 初実施		【夏ごろ予定】 「新学習指導要領に対応した実施要項の見直しに係る予告」	各大学から選抜予告		【夏ごろ予定】 「2025年度大学入学者選抜実施要項」発表 新課程入試（2025年度入試）
	【秋～3月】 新教育課程の編成（仮） ↓ 教育委員会へ提出		【5～6月】 検定済教科書見本 ↓ 新教育課程の編成	↓ 新教育課程の編成の微調整 指導要録の改善 →観点別学習状況の評価の記載必須	新教育課程の編成の微調整	新教育課程の編成の微調整
新教育課程の検討の流れ			指導のあり方・評価のあり方の校内での検討	指導要録の改善に伴う、観点別学習状況の評価の記載		調査書変更

*ベネッセ文教総研作成。

学校としての大きな視点が 新教育課程編成に不可欠

新教育課程の編成を考える際、多くの学校において課題となるのが、必修科目の単位の増加によるコマ数不足だ。働き方改革が進む中、週時間を減らそうとしている学校が増えており、さらに課外活動の充実のため、生徒が自由に活用できる時間を増やしたいという思いもある中で、必修科目の単位数にどのように対応するか、苦慮している学校は少なくない。

文教総研が全国の教師に、どのように各教科・科目等のコマ数を決定し、新教育課程編成を進めていく予定か、ヒアリングした結果をまとめたのが図2だ。

現場の対応の方針は、大きく3つに分けられる。1つめは、育成を目指す資質・能力を軸とした対応だ。例えば、読解力の育成を重視する学校であれば、2年次も文系、理系を問わず、国語をほかの教科よりも増単位で履修させるといった対応が考えられる。また、生徒の学力を分析し、1年次は国語、数学、英語を重視する教育課程とし、地理歴史・公

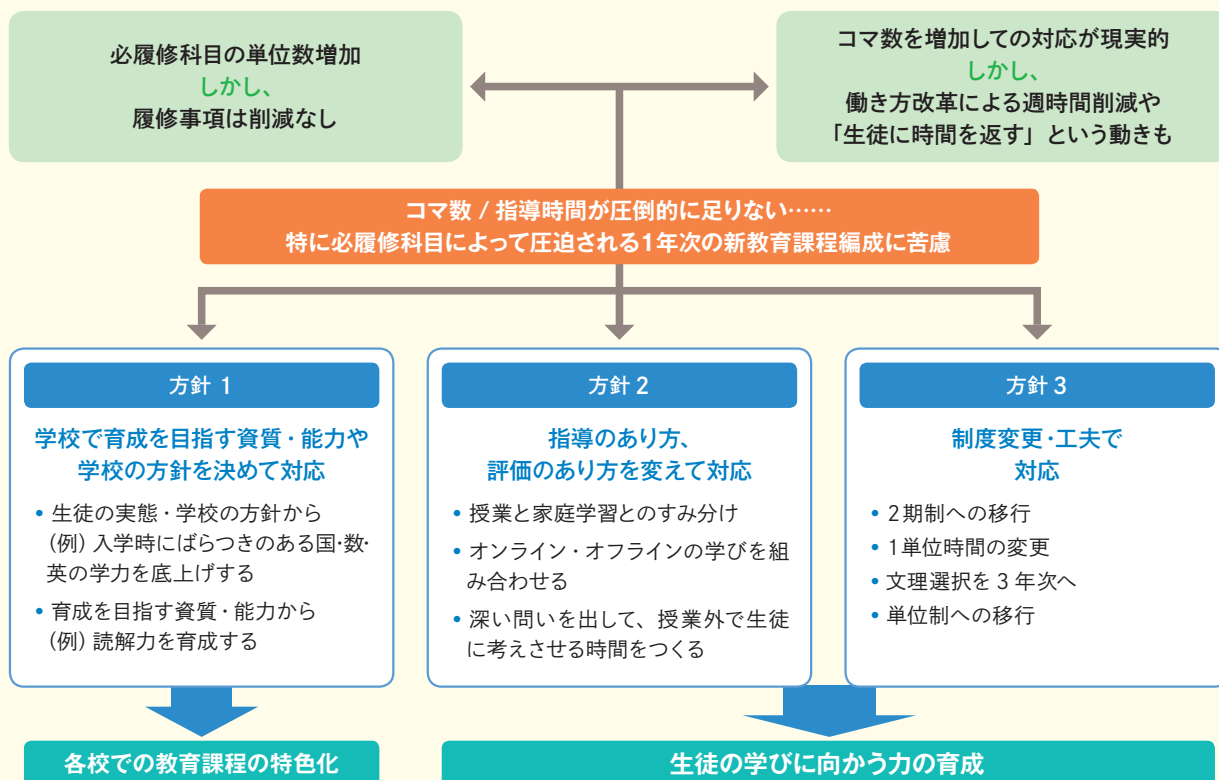
民は1年次に必修科目1科目、2年次に2科目とする予定の学校もある。

2つめは、指導と評価のあり方を変えることによる対応だ。新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業によって、授業におけるICT活用が促進された学校は少なくないが、オンラインツールを使った授業や家庭学習を組み合わせて指導を効率化し、限られた授業時間でも生徒の学びの質を担保する。すべてを授業でやりきるのではなく、生徒への問いを工夫し、生徒の自学自習をより促進させようという学校もある。

3つめは、制度の変更・工夫で対応するケースだ。2期制への移行や1単位時間の変更、3年次からの文理でのクラス分けの実施などによる対応で、新教育課程に対応する学校も見られる。

いずれの対応の方針も、これまでの単位数を参考にした教科・科目間での単位数調整にとどまるものではないことが分かる。新教育課程の編成では、生徒の資質・能力や学校としての特色の明確化といった大きな視点が必要だ。

図2 新教育課程編成における検討ポイント



*ベネッセ文教総研作成。

資質・能力、指導・評価を踏まえた新教育課程編成へ

青森県立青森高校

青森県立青森高校は、2017年度に学校として育成を目指す10の資質・能力「青高力」を設定。その到達度を測るための評価規準と尺度を示すルーブリックと、育成の過程を示すシラバスを作成している(本誌2019年4月号・特集を参照)。学校として育成を目指す資質・能力を共有した同校の教師たちは、新教育課程の編成をどのように進めようとしているのか、話を聞いた。

Q1 どのような方針で新教育課程を策定しているのか？

A1 育成を目指す資質・能力を踏まえ、自校に求められる授業観を校内で目線合わせることが不可欠

矢倉校長 新教育課程の編成を進める上で重要なことは、育成を目指す資質・能力を踏まえてよりよい教育課程を追究するという大前提を校内で共有することです。本校では、学校として育成を目指す10の資質・能力「青高力」を備えた「目指す生徒像」を設定しており、新教育課程の編成も、目指す生徒像の実現につな

がるものになります。本校では、教育部が中心となつて新学習指導要領の「総則」を読み解き、新課程で「目指す生徒像」を実現する際にキーとなる4つの観点を言語化しました(P.70図3)。それは、授業改善、学習の見直し・振り返り、教科横断、そして学習評価です。その4つの観点を新課程における目玉として、教

育課程編成を進めていくことになりました。そのようにして、教育課程編成を教科間のコマ数の振り分けに終わらせず、あくまでも新課程における目指す生徒像の実現のためのものと、校内に周知することが重要です。

千葉教頭 何のための教育課程編成なのかという大きな目的を共有した上で、教師一人ひとりの授業観の転換も求められます。生徒への情報伝達量を授業で最重要視してしまうと、どうしても「時間が足りない、教科書が終わらない」という考えに



校長
矢倉 慎次
しらくら・しんじ
教職歴38年。同校に赴任して3年目。



教頭
千葉 栄美
ちば・えみ
教職歴32年。同校に赴任して2年目。地理歴史・公民科。



教務主任
笠井 敦司
かさい・あつし
教職歴24年。同校に赴任して9年目。国語科。



外国語科主任・1学年副主任
菊池 真理子
きくち・まりこ
教職歴26年。同校に赴任して6年目。外国語科。

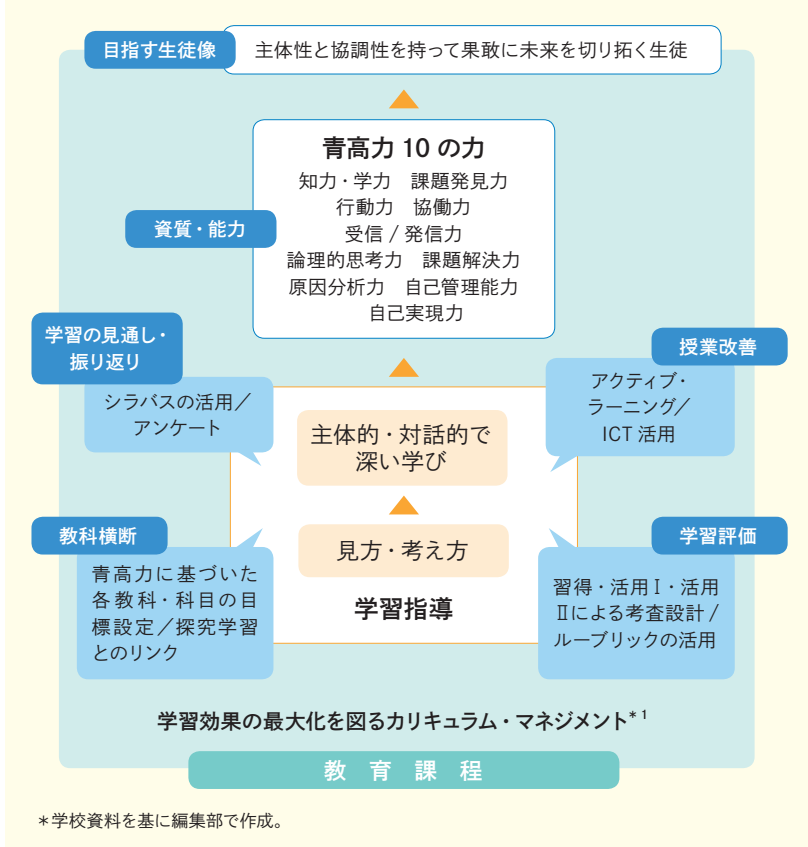
陥ってしまいます。しかし、これからの社会を踏まえて、生徒に必要な資質・能力を考えると、授業の中で必ず生徒が情報を獲得し、正解にたどり着く必要はなく、それぞれの考えが深まっていけばよいと思います。新課程の教科書がまだ手元ない状態でも、これからの授業のあり方を校内で共通のものとするのも重要だと思っています。

菊池先生 「青高力」については、学校全体、そして各学年で毎週のように話し合い、決めていったことを覚えていきます。「青高力」は、各学年での到達目標までをルーブリックにしたわけですが、やはりルーブリックで描いた状態を実際の授業に

青森県立青森高校

- ◎旧青森県立青森高校と旧青森県立青森女子高校が統合して生まれた。網領に「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」を掲げる。2017年度に文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受ける。
- ◎設立 1900(明治33)年
- ◎形態 全日制/普通科/共学
- ◎生徒数 1学年約280人
- ◎2020年度入試合格実績(現役のみ)
国公立大は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、京都市大などに175人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、早稲田大、同志社大などに延べ200人が合格。
- ◎URL <http://www.aomori-hs.ac.jp/>

図3 青森県立青森高校 カリキュラム・マネジメントの全体像



*学校資料を基に編集部で作成。

落とし込む段階になって、これまでとは違う生徒への問い方や題材の選び方にするなど、授業のあり方が変わっていききました。新課程においても、「青高力」のルーブリックと照らし合わせた上で、教育課程の編成に臨むことが求められると思います。

笠井先生 本校では、「青高力」として受信／発信力、論理的思考力を挙げています。自分の考えを適切な形で相手に伝えることは、本校の生徒に欠かせない資質・能力です。新学習指導要領でも重視されていますが、そうした資質・能力を生徒に育むために、教科を横断しながら英語の「論理・表現」と国語の「論理国語」の授業をつくっていくようにしていることも、本校ならではの選択肢だと思えます。資質・能力をそれ

千葉教頭 管理職、教科主任、分掌主任から成るキャリア教育委員会内直轄の作業チームである、新教育課程編成プロジェクトチーム（以下、PT）が新教育課程の編成を中心的に担います。PTは、学年、教科、分掌横断のメンバーで構成され、本校の「新教育課程編成大綱」で示されたステップ（図4）で、編成作業

を行います。もちろん、PTに任せきりにせず、何を目指した教育課程編成であるかを全教師が共通理解し、情報提供などを通じてポジティブにかかわっていく機運を校内で高めていくことも大切です。

笠井先生 新教育課程編成のステップは「新教育課程編成大綱」に細かく明示していますが、実際には、作業

A2

学年・教科を超えたプロジェクトメンバーが、「これからの教育」という視点を持って語り合う

Q2

どのような体制・ステップでコンセンサスを
得ながら教育課程編成を行うのか？

それぞれの教科・科目の授業でどのように育むのか、どのようなテストで評価するのか、日々試行錯誤を重ねています。授業での生徒への発問、そして定期考査の問題が、知識を覚えているかどうかを問うているのか、それとも、知識を活用して課題に取り組むことを求める問題になっているのか、全教科で問題意識を持って

各教師が問い直しています。本校では今年度から、教頭が各教科の定期考査の問題に目を通して、資質・能力の育成につながる作問になっているかを確認し、各教科にフィードバックしています。学校ぐるみで授業改善に取り組むことも、新教育課程の編成を進める土壌として大切だと思えます。

*1 教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っていくこと。

を進める中でさらに工程を細かくして時間をかけたり、統合したりするケースも出てくると思っています。大切なのは、これからの社会と求められる学びのあり方を念頭に、学校の教育目標を踏まえて、教科の立場を超えて語り合いながら編成を進めていくイメージを全教師に持つってもらうことです。9月には、「大学入試改革×withコロナ×学校教育で大切なこと」というテーマで、新学習指導要領の「総則」の理念をAfterコロナの教育の形にどのように結びつけていくかを校内で議論しました。そうした大きな視点による校内での対話を、特に作業工程の前半では重視しています。

能力の育成に注力してきました。ですから、例えば新教育課程の検討の過程で、他教科の教師にパフォーマンス評価について共有してもらったことなどは、新課程においては指導と評価の改善も不可欠であることを理解する上で大きな意味があります。

宍倉校長 目の前の生徒に一生懸命という意味では、本校もほかの多くの高校と同じです。ただ、新教育課程の編成において先だけ先に歩き始めることができているとしたら、それは笠井先生を始めとするミドルリーダーが活躍できているからでしょう。教科書も入試もその実像がまだ見えないからこそ、「こんな資質・能力を育みたい」と、大きな視点で語り合うことが大切であり、そうした時に力を発揮してくれるのがミドルリーダーだと思います。

より詳しい内容は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！



新教育課程の編成方針と校内での推進方法
 ・青森県立青森高校の実践事例・校内で目線合わせができる校内資料
 (教科横断・授業改善・学習評価の構図や論点など)

有識者による新課程の動画解説も満載

図4 新教育課程編成までのステップ(「新教育課程編成大綱」より)

1. 新教育課程編成のための事前の研究・調査(グローバルな視座から)

- ・新学習指導要領改訂のポイントについて理解
- ・県教育委員会「教育課程編成資料」の読み合わせ
- ・ベネッセのWebセミナー「Withコロナにおける学校教育の形とこれからの学びのデザイン」への参加
- ・ベネッセのハイスクールオンライン内の「新課程レポート」や大学主催の研修会などを活用した校内研修
- ・「大学入試改革×withコロナ×学校教育」で大切なことは何かを校内で議論

約1カ月(8月)

2. 学校の教育目標など、教育課程の編成の基本となる事項の確認と共通理解(ローカルな視座から)

- ・本校の綱領「自律自啓」「誠実勤勉」「和協責任」と、綱領を体現する生徒像＝「目指す生徒像」、目指す生徒像に必要な資質・能力である「青高力」の内容の確認
- ・現行教育課程で課題だと感じている事柄の洗い出し・明確化
- ・現在の授業・考査・週末課題・行事などに抱えている課題感の洗い出し
- ・「評価」に関する課題(特に「パフォーマンス評価」)について、実技科目の評価の仕方を学びつつ、評価の観点・方法についての共通理解
- ・本校生徒の進路選択・受験の特徴の確認
- ・ここまでの視点を総合して、「新教育課程編成の方針」を策定

約1カ月(9月～10月)

3. 新教育課程の編成作業

- ・必修科目を軸に、標準単位数で2022年度入学生の教育課程(1～3学年)を策定
 - ・上記1、2の視点を踏まえ、単位数の増減、学年の配置を調整
 - ・教育課程表「原案1」としてまとめる
 - ・上記2で策定した「新教育課程編成の方針」に基づく「原案1」をキャリア教育委員会に諮問
- *学校資料を基に編集部で作成。

約1カ月(10月～11月)

一疑問や課題を解決!実践につながる!

新課程レポート

ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ > 入試改革/新課程 からアクセス